

語物の語法

三 谷 榮 一

古代に於ける語部のかたり方がどんなものであつたか、それは今日よくわかつてゐないけれども、平安時代の北山抄や匡房の江家次第に記録されてゐる語部のかたり方が、「其音似祝又涉歌聲」とあり、祝とは何を意味するかこれまたよくわからないもの、ほがひと祝詞の意とも解される。ほがひ人のやうに或は祝詞のやうに調子づけ、ところ／＼を歌の聲のやうに語つたものらしい。つまり、抒情的要素の多い部分は歌ひ、叙事的要素の方は句讀をきちんきちんと切つて律調的となへたのではあるまいかと思はれる。つまり語部のカタリゴトは全体的に調子を帯びたコロキヤアルでない叙述をするものであつたことはいへる。一体日本人は元來今のやうに話すといふことは出来なかつたもので、オシヤベリは忌む行爲であつた。貴人の面前などで改めて物をいふときは調子も言葉も自然と高まつて、歌の言葉に近いものとなつたらしい。土佐日記に

「舟とく漕げ、日のよきに」と催せば楫取舟どもにいはいく、「御舟より仰せ給ふなり。あさぎたの出で來ぬさきに綱手はや引け」といふ。この詞の歌のやうなるは楫取のおのづからの詞なり。

とある。とかく改つた他所ゆきの言葉には調子づき調子づくと言葉に近づくと、それがカタリゴトの叙述であつた。緊張したところは節をつけて歌ふやうに語つたのであつて、カタリゴトの系統から遠く糸をひく今日の民謡でも、ま

だかかたるテクニクが意識せずとも傳へられてゐて、「むかしむかしそのむかし」と調子づけたり或る時には歌つてゐるのかと思はれるやうなのさへある。このやうな調子に乗つた約束的な語が昔話にはまだ傳承されてゐた。かうした律調的なテクニクがカタリ文藝に傳へられたからこそ、語物の系統の軍記物語に七五調のやうな調子に乗つた詞章が必ず挿入されなければならなかつたのだと思ふ。

事實カタリゴトの口誦的要素を比較的記録してゐると思はれる古事記、出雲風土記などの文辭を見ると、カタリとしての律調的な要素を多分に見出すのである。例へば

故爾詔三天日子番能過々藝命二而。離三天之石位一。押二分天之八重多郎雲一而。伊都能知和岐知和岐弓。於三天浮橋一。宇岐土摩理蘇理多々斯弓。天三降坐于三笠紫日向之高千穗之久士布流多氣一。故爾天忍日命。天津久米命。二人取三負天之石勒一。取三佩頭推之大刀一。取三持天之波土弓一。手三挾天之眞鹿兒矢一。立三御前一而仕奉。

などは、古事記としても最も重要な一である天孫降臨であるから、恐らく神聖なカタリゴトとして重要視し、出来るだけ忠實に文字に移したものと思ふ。それだけにこれを純漢文体に表現した日本書紀の本文と比較して見ればカタリゴトの型がほゞ想像し得たのである。書紀を見ると、ここが極めて平明な簡潔な文となつて、

皇孫離三天磐座一。且排二分天八重雲一。稜威之道別々々而。天三降於日向襲之高千穗峯一矣。既而皇孫遊行之狀也者。則自三樓日二上天浮橋一。立三於浮渚在平処一。而脊穴之空國。自三頓丘一覓レ國行去。到三於吾田長屋笠狹之崎一矣。

とある。併しよく見ると、如何に出来る限り純漢文化しようと思んでも、カタリゴトの調子の全部は翻譯することが不可能だつたことがわかる。「稜威之道別々々而」の詞章などの残存がそれである。これによつてカタリゴトの本來の詞章が窺へたわけである、ことを古事記では更に詳しく

離三天之石位一

天の石座を離れ(て)

押二分天之八重多那雲一而

伊都能知和岐知和岐弓

天之八重多那雲を押分けて

天威の道分き道分きて

於三天浮橋一。宇岐士摩理蘇理多々斯弓

天之浮橋に浮渚りそり立たして

天三降坐于三座紫日向之高千穗之久士布流多氣一

筑紫の日向の高千穗の樓觸之峰に天降り坐しき

と書紀に見えた部分は殊に一字一音に表して大切に保存されてゐた、それだけにカタリゴトの姿は窺へたわけである。句の長さが略定まり、句讀をきちんきちんと切つてコロキアルでない叙述、これがカタリの特質である。しかもその反覆が重疊して醸し出される律調美は明かに舊辭又は本辭に傳承された形そのものを残したのに近いことは間違ひない。天石屋戸の章もカタリゴトからいへば、いふまでもなく重要な傳承であることに相違ないが、そこを古事記では

科三玉祖命一、令レ作ニ八尺勾瓊之五百津之御須麻流之珠一而、召三天兒屋命布刀玉命一布刀二字以レ而、内ニ拔天香山之眞男鹿之

肩取而、取三天香山之天之波々迦此三字以レ而、令ニ占合麻迦那波一而、自レ麻下四、天香山之五百津眞賢木矣、根許士爾許士而許

下五字、於三上枝一、取三著八尺勾瓊之五百津之御須麻流之玉一。於二中枝一、取三繫八尺鏡訓ニ八尺一。云ニ於三下枝一、取三垂白

丹寸手青丹寸手一而、訓レ垂云ニ。志殿一

とある。それを訓讀して

玉祖命に科せおほ(て)

八尺の勾瓊まがたまの五百津の御須麻流の珠を作らしめて

天兒屋命、布刀玉命を召びて

天の香山の眞鹿男の肩を内拔に抜きて

天の香山の天の波波迦を取りて

占合へまがなはしめて

天の香山の五百津眞賢木を根こじにこじて

上枝に八尺の勾璣の五百津の御須麻流の玉を取り、著け、(て)

中枝に八尺鏡を取り、繫け、(て)

下枝に白丹寸手、青丹寸手を取り、垂、(て)

と私案に依つて十行に分けて見ると、切口上式な長さを定め句讀をきちん／＼と切つて叙述して行くカタリの型が現れてくる。各行が一字一音に書かれてゐるか、その行に一々読み方の注が附けられてゐることから見ても、如何に注意して訓まなければならなかつた所であるかがわかるのであり、またそれだけに重要な個所であつたともいへたのである。此處もよく見ると、「天香山之眞男鹿之角」「天香山之天之波々加」「天香山之五百津眞賢木」と同一構成の対句を重ねて音調を整へたり、「於_二上枝_一取著…」「於_二中枝_一取繫…」「於_二下枝_一取垂…」と同一型の句を反覆したりしてゐる。これらの句の終りが、「取り著けて」であり、「取り繫けて」であつて、助詞テの反覆重疊の修辭法からなるのであらうと思はれるのは、この同一型の最後の句に「而」とあるところから見てもいへると思はれる。同様「科_二玉祖命_一」も「玉祖命に科_二せて」と訓むべきは、次に「召_二天兒屋命布刀玉命_一而」とある形からも窺へる。全体的に見て助詞テの反覆による一種の脚韻の如き働により音調を整へるに役立つてゐる。テは文法上は並列を現す條件法の一といふけれども、カタリゴトには屢々疊んで用ゐられる有力な表現仕方の一であつて、出雲風土記の國引の神話の

栲姦志羅紀之三崎矣

國之餘有耶見者

國之餘有詔而

童女胸鉏所取而

大魚之友太衝別而

波多須々支穗振別而

三自之綱打挂而

霜黑葛聞々耶々爾

河船之毛々曾々呂々爾

國々來々引來縫國

八穗米支豆乃御埼

栲姦志羅紀の三崎を

國の餘ありやと見れば

國の餘ありと詔り給ひて

童女の胸鉏取らして

大魚の鱗衝き別けて

幡薄穗振り別けて

三搥の綱打ち掛けて

霜黑葛繰るや繰るやに

河船のもそももそるに

國來國來と引き來縫へる國は

八穗米杵築の御埼なり

の対句脚韻の反覆重疊の中にも見ることが出来る。殊にこの風土記の一節は續いて北門佐伎之國、北門良波乃國、高志之都々乃三崎からそれぞれ國を引いたことを語るのであるが、その場合もそれぞれ皆右のと全く同詞章の繰返しをしてゐるところから見ても、カタリゴトそのまま、が相当忠實に記録されたものと考へられる。その中にやはり助詞テの重疊する韻を見ることは並列、條件法以外に今迄の規範文法以前のテの職能を考へなければならぬのではないか。ちやうど今日でも人によると話に調子づく場合、やたら「さうして」「さうして」と連發したり、「:」によつて:によつて:」と重ね込む人を見受ける。何かその折は話に律調味さへ感ずるのであつて、助詞テの職能も全く同じ範疇に屬すべき、つまり文章語ではなく口頭に用ゐられる語であつたのである。助詞テは今日でも種々の問題をもつてゐ

る。「…して下さい」のやうな場合のテは動詞に添うて名詞化する役目をなしてゐる。源氏物語のテの用例は「櫻の細長に艶やかなる搔練とり添へては姫君の御料なり（玉葛）」「臥しても起きても涙の干る間なく（御法）」のやうに名詞化するのがあつて今日より自由であつたことがわかる。この名詞化するテは古代の託宣の言葉が

好く我が前を洗め奉らば我こゝに善き驗を出して

ひのらぎの八尋杵根底附かぬ國

嬪子の眉引きの國

玉匣かゞやく國

菩提宝ある白袈新羅の國を

丹波もちて平伏け賜はむ

と播磨風土記逸文に見えるやうに名詞を羅列して行く。このやうな例は記紀を通じていくつか擧げることが可能だがこの解りにくい莊重なしかも漂渺たる表現こそカタリゴト系列の古形であることを想ふ時、何かこの名詞化するテに遠い時代の面影が残つてゐるやうに思はれるのである。

とにかく助詞テは文章語でなく、律調味を帯びさせる作用をなす口頭語であつた。従つて和歌に使用されることは少い。流石に歌よみは他の語と異なる氣分を敏感に察してゐたものらしい。無名抄にある有名な話として、基俊、俊頼の二人が張合つてゐた頃、膽西上人の處で俊頼が「秋の暮の心」といふ題に「明けんとも猶秋風の音信れてのべのけしきよ面がはりすな」といふ歌を作つた。名は隠してあつたのだが、俊頼と悟つた基俊が難じて「いかにも歌はこしの句のすゑに、て文字すへつるに、はかばかしき事なし、さへていみじくき、にくき物なり」とテの字のあるのを非難した。俊頼は何ともいはなかつたが、其の座にゐた琳腎が、「その證歌こそ、一つおぼえ侍れ」と反駁したとこ

る「いので承はらん。よもよろしき歌にはあらじ」といつたのに、保守派の基俊にとつては神とも尊崇する紀貫之の「さくら散る木の下風はさむからで」と「はてのて文字をながながと詠じ」たのでこれには基俊はすっかり参つたといふのである。この場合は基俊は負けてはゐるが、保守派で古來の傳統を重んずる彼の如き歌人にとつては、テが歌言葉として「いみじくき、にくき」耳障りする語であつたことはいへたのである。それだけに一方からいへば口頭語であつたと認むべきであらう。殊にテを重疊して行くのはどうしても口頭語としての美であつて、文章語としての美ではあり得ない。無名草子の中に「うきなみ物語」を批評した條に

またたかのぶの作りたるのとて、うきなみとかやこそ、殊の外に心入れて作りけるほど見えて、あはれに侍れど、そもなか、ことばづかひなどでつゞいけにて、いと心ゆきて覚え侍らず

とある。散佚した物語故よくわからないが、續け方が助詞のテを用ゐることが多過ぎるのが文章体として面白くないと難じたものらしい。また源氏物語帚木に見える漢學者の娘の言葉として有名な會話の箇所

月頃ふゆがら風病重ふゆがらきに堪へかねて、極熱こくねつの草藥くさやくを服していと臭くさきによりて、なむえ対面たいめん賜はらぬ

といふのがある。極端な例であるだけに作者としてはこの會話体には殊更と注意して描いたものと思ふ。そこに右のやうにこのテ文字の多く見えるのは、やはりかかる低い身分の者が改まつて物を言ふとき自然口頭に多く見えたことを示してゐる。それにしても日本にはカタリごとそのものの純粹な記録は餘りにもない。文章語と口頭語との問題はある意味に於てなかなか調べにくいが、室町時代耶蘇會學林から出た「天草本平家物語」は当時平家物語が琵琶法師達によつて語られてゐた様子を充分に残してゐる点甚だ貴重な資料なのであるが、それは大體の篇次を流布本に依つてゐる。右馬之允、喜一檢校ふたりの對話風の口語体で編まれ、右馬之允が聴き方で喜一檢校がカタリのであるがその中

この後は一度笑めば、百の媚生するほどの美人であつたによつて、幽王うれしいことにしてその事となう常に烽火をあげられたによつて、皆人馳せ集れども何事もなければ

と語り手の語る地の文には、此處ばかりではなくテの反覆は目立つのである。ここを流布本に見ると

(后) 一度笑めば百の媚有けり。幽王是を嬉しき事にし給て、其事となく常に烽火を揚げ給ふ。諸侯來に怨なし。

となつて助詞テは一個所見えるだけである。

或は

さうあつて、忠盛は御前ごせんで舞はれてござつたれば、公卿達がこの人をあざけつて、拍子をかへて伊勢瓶子は酢瓶なりと云うてはやされてござつた。

といふところが流布本には

忠盛又御前の召しに舞はれけるに、人々拍子をかへて伊勢瓶子は酢瓶なりとぞはやされける。

とあつて僅かテの使用が一個所である。それに対して五個所となつて語られるところに語るためには如何に助詞テの使用が必要であつたかを物語るものと思はれる。このテの反覆重疊する表現法は文章法からいへば、決して巧なものとはいへない。人によつては不快を感じるであらう。けれどもその助詞テの含む一句一句を切口上式に相手に得心させて行くやうに活用するカタリゴト特有の會話体の語であつたわけである。語られてゐると抑揚があるから別にテが連続しても嫌味には感じられず、却つて調子づいて聴く者には響くのである。記録は新しいが、八丈島の八郎爲朝傳説の根據となつてゐるかと思はれる巫女のカタリゴトがある。往昔のカタリゴトもかくもあつたかと想像されるのであるが、そのカタリゴトの中でも最も感銘深い船戦のところの傳へが、

四郷の百姓申す。とて。

上臈五ぜんたて(で?)申し出す。

十や三人と申しては

京の殿まで申し出す

二ほ(日本)の殿えかもういけや(?)

二ほのかたきの寄せ來れや

千ぞう小舟を押し浮けて

夜のみ忍びてやさしやな

山ほうしのびてやさしやな

共にしくれてやさしやな

水無き鳥え馳せつけて

人見の石に腰かけて

水にかられてこいかれて

はたきりおれてはたきか(?)

中のこしまの水とりて

君がぞうふとあけちもの……

とこれまた常に反覆重疊して行く修辭法を用ゐ、音調を整へてゐる。反覆して行きながら少しづつ、變へて行く。殊に助詞テによる重疊の姿はよく古事記や風土記の持味に類似してゐる。かうした盛り上りせり上つて積まれてゆく重疊の調子に語られてゐる時は限りない律調を感じたのである。

現在民間に語られてゐる昔話にも、よき傳承者達はかかるカタリゴトのテクニツクを意識せずとも自然に保持してゐるのは興味あることであつた。最近に出た岩倉市郎氏の「蒲原郡昔話」の中には岩倉氏の絶大な努力によつて速記をもつて傳承者のカタルそのまゝの口寫しが保存された二つの話が記録されてゐる。その一の「かちく山」を見る

と、その語り出しが
爺さんと婆さんがあつたてんが、雪が長う降らないでゐたんさんが、爺さんへ——秋木山へ木切り行つたてんが、さうしてまあ切つてゐた処が猪が出て来て、木のたつこつに上つて、爺さんあの木の切りやう爺さんあの木の切りやうと言うて笑ふので、爺さんが業焼いて、斧かつねて追うて行けば逃げて行くてんが、さうして何度もく爺さんを笑ひくしてほつかければ逃げて行くてんがの。

と語られてゐる。「あつたといふことです」の意の「あつたてんがの」を時折挿んで調子をととのへる一方、助詞テを連續してカタリの句調を調へてゐるのが窺はれる。更にこれより先の部分を見ると一層目立つてテが反覆重疊してゐる。

さうして置いて木をタコン／＼と伐つてゐた処が、親方知らんで其処へ飛上つて、又やつぱり爺さんあの木の切りやうと言うて爺さんを馬鹿にしたといひ。今度ははたいて呉れようと思つて、ソの／＼と言つて、斧たがまて行つた処が……

勿論かかるカタリ方が、昔ながらの全き姿とはいへないにしても、その言ひ廻しの中に於ける助詞テの重疊振りは曩に掲げた諸例と對比して、カタリゴトに如何に必要な用語であつたかが想像され、この特殊な使用語を通じて遠い古事記の昔から今日に到るカタリゴトの傳統の姿を窺ひ知ることが得たのである。

さてこのカタリ行爲が記録され音讀されるものに變つても、カタリゴトに見た律調味は保存されて残された。祝詞宣命に見える

高天原に神留り坐す皇親神魯企、神魯美之命以ちて（命以氏）、皇御孫之命を天津高御座に座せて（坐氏）、天津蠶の鏡劔を捧げ持ち賜ひて（賜天）、言壽き宣たまひしく、皇我が宇都の御子皇御孫之命、此の天津高御座に坐して（坐氏）、天津日嗣を萬千秋の長秋に、大八洲豐葦原之國を安國と平けく所知食せと言寄さし奉り賜ひて（賜比）天津御量を以ちて（氏）、事問ひし磐

根木の立ち、草の可岐葉をも言止めて（言止氏）…（大殿祭）

などがその一例で、明瞭に節奏的修辭が存在してゐる。しかもそれが宣命書きの氏、天を用ゐて、助詞テを重ねる律調を示して呉れる。祝詞がカタリゴトと同じ道を辿つて派生し發達したものであるから、音讀されるやうになつても元來の型は残つてゐたのである。音讀されるものにも、それ／＼の節奏的修辭がなければならなかつた。同様にカタリゴトから發生し展開したモノガタリに律調の性質、節奏的修辭の見えるのは當然といはなければならぬ。一方では筆錄したものを「物語」と呼稱するやうにやゝ固定しかゝつてゐながら民間ではまだまだ古來の姿を残してゐたと認められ、それが新猿樂記や梁塵秘抄口傳集に見えるモノガタリなる名稱で呼ばれた藝能であつたのであらう。（津輕民俗第二號拙稿「物語と物語る日」）宮廷貴族の人々の間に、紙に筆錄されたものが物語だと考へられて來た時代でさへ、やはりその名稱の故郷の印象は充分に失はれてゐなかつたのである。

源氏物語を見ると物語は一人でよむだけではなく、カタルに近い行爲が行はれてゐたのである。帚木の雨夜品定の條に、「童に侍りし時、女房などの物語讀みしを聞き、いとあはれに悲しく、心深きことかなと、涙をさへなむおとし侍り」とあり、螢巻にも「この頃をさなき人の、女房などに時々讀まするをたちきけばものよくいふもの世にあんべきかな」とある。また同卷に「姫君の御前にて、此の世なれたる物語などな讀みきかせたまひそ」ともある。併し幼き人々だけではない。紫式部日記に「うちのうへの源氏の物語人によませ給ひつゝ、聞しめしけるに」などといつてゐるところから見ると、多くの場合何人が集つてゐるところで音讀されたのであつて、ちやうど後世辻で行は

れた太平記讀みと同様な方法、やはりそこにモノガタル傳統は残存してゐたわけである。嵯峨のかよひちに「源氏はじめんとて講師にとて女あるじ（阿佛尼）をよばる。すのうちにてよまる。まことにおもしろし、よのつねの人によむにはにす」とあつて、阿佛尼の巧みな朗讀調に驚嘆してゐる。音讀して聞かせることが物語の性質として忘却し得ない半面であつたのだ。それだけにカタリゴトの律調美が物語に傳つてゐることも注意しなければならぬことであつた。源氏物語をよく見ると、例へば

いで思の外なる御事にこそとて。

こころもて草のやどりをいとへどもなほすゞ蟲の声ぞふりせぬ

など聞え給ひて、琴の御琴召して、⁵珍らしく⁵彈き給ふ。宮御数珠ひきおこたり給ひて、御琴に猶心いれ給へり。月さし出でて、いと花やかなる程も哀なるに、空をうち眺めて、世の中さ⁷づまにつけてはかなく移り替る有様も思しつゞけられて、例よりも⁵哀なる音、かき鳴らし給ふ。（鈴蟲）

などは卷の名の由るところとして、この卷では最も中心となる重要な部分であるが、そこが助詞テの連続重疊して成立ち、テの重疊が一息つくその時を五音か、五・七音の快調で止めて、明らかに朗讀の折の調子づく場面が眼に浮ぶやうである。同様な例は

僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子のずずの玉の装束したる、やがてその國より入れたりける箱のからめいたるを、すきたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに御薬ども入れて、藤櫻などにつけて、処につけたる御贈物ども捧げ奉りたまふ（薄紫）

にも見える。文法的には並記される用法であらうが、送り物の形容に調子づくと作者も朗讀調となつて、知らず知らずのうちに自らなる傳統は此處に現れたと見るべきであらう。助詞テばかりでなく

昔の上手ものとりくにかけるに、延喜の御手づから事の心書かせたまへるに、又わが御世の事もかかせたまへる卷に、かの齋宮の下りたまひし日の大極殿の儀式（絵合）

の如きもある。助詞ニも義の出雲風土記のカタリゴトに見えたやうに、口頭語として特殊な役割をなす語である。

「さうして」「さうして」と連發する人達に対して「さうだから」「さうだから」といふ人の一群のあることを想起する。テにしてもニにしても見る文字による文章法からすれば、かかる重複重疊は一種の嫌味を催す失敗であるかも知れないが、語つたり、朗讀したりして聞かせる文學になると、この重複が却つて一種の感情のたかまりをさへ表してくるのである。私はこの助詞テの用法の検討によつて遠い語部の昔のかたり方が想起されるのではないかと信ずるのである。